エリュアールの最後の愛

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嶋岡, 晨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7440

エリュアールの最後の愛

嶋岡晨

クロード・ロワの名を初めて記憶したのは、創元社版世界現代詩叢書の一冊、中村真一郎訳『シュペルヴィエル詩集』によってで、これはわたしが明治大学に入学した年十一月の刊行だから、もう三十五年も前のことになる。原書（*Jules Supervielle*; Poètes d'aujourd'hui 15. Pierre Seghers éditeur.）の編集と解説にあたったのが、Claude Roy——。そのロワのシュペルヴィエル論が、メルロー・ポンティの『知覚現象学』を援用し、ことばと〈物〉と人間との関係の奔放な詩的創造に新鮮な解釈のひかりを投げかけ、現代の神話を生きるよろこびを読者に充分自覚させるみごとなものであった。

一九一五年生まれの、詩人、エッセイスト、小説家のロワには多くの著書があるけれど、この拙稿では、Essai d'Autobiographie（自伝的エッセイ）と称する五七〇ページほどの大冊『わたしたち』（*Nous*, Gallimard, 1972）から恩恵をこうむることになった。ひさしぶりにシュペルヴィエルの名解説者に頓首しなければならない。

拙稿は、ポール・エリュアール（Paul Éluard, 1895-1952）の最後の愛について些細な考察を試みるものだが、ガラ（Gala）、ニューシュ（Nusch）につづく第三の、そして最後のエリュアールの妻、ドミニク（Dominique）について、『わたしたち』の一章は貴重な証言をさし出してくれた。

——それによれば、ロワとほぼ同年齢のドミニクのもとの名は、オデット・ルモール（Odette Lemor）、二十歳のときドミニクと改めたのだった。出身地はフランス南西部のペリゴール（ドルドーニュ）、といったことも、かつてボルドーの大学で知りあい、ロワの得た彼女のデータ。「メキシコ人と中国人の混血児のような目の

色をした、横柄で不精ったらしい感じの、一人前の娘」「頬骨の出た、皮肉っぽいアーモンド型のインド人のような目をした」ドミニクの像が浮かび出てくる。R・D・ヴァレットやR・J・セガラの編んだ『アルバム・エリュアール』を見ても、さほどの美人でなく、タイプはガラに近い。エリュアールと初めて会ったとき、彼女は三十二、三歳。別れた最初の結婚相手との間に生まれた十二歳の娘、カロリーヌと暮らしていた。女性ジャーナリストとして各国を一人で飛びまわるだけに、性格にも少々けわしく粗いところがあったようだ。エリュアールとの再婚の直前、町なかでばったり会ったロワに、「……あなたの親しいポール・エリュアールと結婚するのよ。あの人なら《有利な結婚相手（beau parti）》だって、みんなが言ってくれるから」と、まことに率直に告げたりしている（もっとも、ロワはそれを ironie と取っているが）。

詩人エリュアールの生涯に関心のある者なら、彼の最初の妻がガラで、のちに画家ダリのもとへ奔った女性だと、たいてい承知しているだろう。スイスはクラヴァデルの結核療養所で知りあったころから数えると、離婚が決定的となる一九二九年まで、十七年間がガラとの愛のサイクル。第二の妻ニューシュとのサイクルは、彼女が脳溢血で急逝する一九四六年までの、十七年間。そのあと二年半ほどのブランクを置いて、詩人歿年の一九五二年までの、わずか三年間が、ドミニクとの愛のサイクル、ということになる。もっとも、『ガラ宛書簡集』――Lettres à Gala [1924-1948], Gallimard, 1984.――を読んでもわかるように、ほんとはそう単純にサイクルを数字で仕切ることは、むずかしい。しばしば、詩人はニューシュの現身にガラの幻身を重ねていた（その事実についてわたしはすでに、「新潮45」昭和六十年七月号発表の拙稿でくわしく紹介した）。

ニューシュの死後、エリュアールはしばしば自殺の衝動にかられた。それほどの悲痛の情にとらえられた詩人を危機から救ったのは、年少の親友夫婦、ジャックリーヌとアラン・トリュタだった、と、セガラの『アルバム』の説明文や、アルベール・フルニエの著書『住居、時代との再会』（Albert Fournier, *Demeures du temps retrouvé*, Les Éditeurs Français Réunis, 1971.）は証言している。トリュタ夫妻は、ゾラと『居酒屋』の時代をしのばせるシャペル通りのぼろアパルトマンの、エリュアールの部屋に何カ月も同居して面倒を見た。この時期の詩集『記憶すべき肉体』（Corps mémorable）を

ジャックリーヌとの官能的（charnel）な愛の産物と見る研究家もいるようだが、それはどうだろうか。たとえばリュック・ドコーヌ Luc Decaunes――一九一三年生まれの詩人で、エリュアールの娘セシルの最初の婿だったこの人物は、『エリュアール――愛と反抗と夢』（*Paul Éluard-L'amour, la révolte, le rêve*-Balland, 1982）のなかで、

『愛・詩』*L'Amour la poésie*, 1929
『豊かな目』*Les yeux fertiles*, 1936
『記憶すべき肉体』*Corps mémorable*, 1947
『不死鳥』*Le Phénix*, 1951

を愛の四部作とし、それぞれを、ガラ、ニューシュ、ジャックリーヌ、ドミニクとの愛の代表的所産とみなしている。『記憶すべき肉体』が官能的イマージュに溢れ、また「ジャックリーヌがわたしの生をひきのばす」との一句があるからといって、彼女の存在をあまり大きいものとするのは危険に思える。少なくとも『豊かな目』＝ニューシュと『記憶すべき肉体』＝ジャックリーヌとでは、内容的にまた体験サイクル的にも、比べものにならない。

トリュタ夫妻の友情にはげまされ、みずから想像力によって mémorable なものとして性愛のよろこびを詩化し、それを生のバネとしながら、しかしそれ以上にエリュアールが救われたのは、レジスタンス（対独抵抗運動）時代の詩「自由」によってすっかり有名になったコミュニスト詩人としての、社会的行動の多忙さによってではなかったか。

プレイヤード叢書版全集（P. Éluard, *Œuvres complètes*, I, Gallimard, 1968）の年表とA・フルニエの『住居、……』の数ページから、行動の跡をひろってみる。――一九四七年七、八月、マルセイユに滞在。フランス大学連合会（ユニオン・フランセーズ・ユニヴェルシテール）の教授・学生のための講演に、エクス（Aix）へ行く。七月には、ロンドンのローランド・ペンローズ家にも滞在。この年、『時は溢れる』（Le Temps déborde）ほか三冊の詩集と、一冊の（シャトーブリヤンからルヴェルディにいたる）アンソロジーを刊行する。翌四八年四月には、ポーランド南西部の工業都市ウロツワフ（Wroclaw）での平和会議に、親しい画家ピカソとともに出席し、功労賞を受ける（ただし、フルニエによればこれは同年八月のこと）。五月には、スイス、ついでブルガリアへ招かれる。この年、『政治詩篇』（Poémes poliques）ほか五冊の詩集を刊行。そして一九四九年――四月、パリでの世界平和会議にフランス代表として参加。詩集『レダ』（Léda）『愛の季節』（La

Saison des amours）が刊行される五月から六月にかけて、マケドニアからギリシアへ旅行。ギリシアでは、民族解放戦線のパルチザンたちとともに、グラモス山中で何日も過ごす。七月、生地サン・ドニでのロベスピエール（十八世紀の革命家）の胸像除幕式に参列。同月末、ブダペストに飛び、ハンガリーの革命詩人サンドール・アレクサンドル・ペテーフィの歿後百年祭に出席（パブロ・ネルーダも参加）。九月初め、メキシコでの平和会議に出席。その会場で、エリュアールは自分の娘ほど若いドミニクと出会ったのだった。

五十四歳の詩人に、新しい（最後の）愛が生まれた。たちまちドミニクに魅せられたエリュアールは、十月には彼女を伴ってパリに帰り、以後、マヤコフスキー展の催されるプラハへ、仏ソ協会の会合のあるソフィアへ、メーデーのモスクワへ、と、しばしば彼女とともに行動した（ピカソ夫妻を立会人とする結婚式は、五一年六月十五日だが、実質的には、二人は四九年秋に結ばれていたと見ていいだろう。ドコーヌは、それを四九年十二月としている）。

ロワ、ドコーヌ、フルニエらの証言をつきあわせてみると、第三の妻、二十いくつも年少のドミニクの、ほとんど言いなりになっている大甘のポールが浮かび出る。亡き前妻ニューシュの思い出のしみついた、シャペル通りのアパルトマンに居たくない、とドミニクが言えば、ヴァンサンヌの森に接するシャラントン・ル・ポンのグラヴェル通り五十二番地（52, avenue de Gravelle）に、より快適なアパルトマンを借りる。ドライヴ好きな彼女のために、折畳み式幌付きの車を買ってやる。ドコーヌに言わせれば「外出、レセプション、旅行の好きな新しい妻（sa nauvelle épouse qui aime les sorties, les réceptions, les voyages.）」のために、詩人はよろこんで貴重な蔵書や絵画を売りとばし、むりをして原稿料かせぎの仕事をする。ロワによれば、「ターザンと暮らす野生の娘のしなやかさと、『ふしぎの国のアリス』のなかでにっこり笑う猫の重々しさ」をもって、十二歳のカロリーヌがそんな彼らをじっと見ていたわけだ。

だが、ともあれ、ドミニクこそは、死を数年後にひかえた〈愛〉の詩人に、「青春の幻想（les illusions de la jeunesse）」をもたらした存在であった。

生前最後の詩集『不死鳥（フェニクス）』のなかで、とりわけ「今日現存するドミニク」の一篇は、それを証（あか）すものと言える。ぜんぶで五十七行の詩は、こう始まる。

Dominique aujourd'hui présente

Toutes les choses au hasard
Tous les mots dits sans y penser
Et qui sont pris comme ils sont dits
Et nul n'y perd et nul n'y gagne

Les sentiments à la dérive
Et l'effort le plus quotidien
Le vague souvenir des songes
L'avenir en butte à demain

（偶然まかせの　あらゆることがら
考えなしに口にする　あらゆる言葉は
言われたとおり受けとられ
損する者　得する者も　一人もいない

なり行きまかせの　感情
いかにもなじみの　骨の折りよう
さまざまな夢の　あいまいな思い出
明日ばかりがめあての未来）

ここに並列されるのは、statique でいのちの輝きも躍動も示さない、ことばと事物と人間との関係、あまりにも banal で日常的（quotidien）な生き方を指す詩句である。未来といっても「明日」のことでしかない、そんなたよりない刹那的な気持ちと暮らしぶり。同質の表現があと二連つづく。

Les mots coincés dans um enfer
De roues usées de lignes mortes
Les choses grises et semblables
Les hommes tournant dans le vent

Muscles voyants squelette intime
Et la vapeur des sentiments
Le cœur réglé comme un cercueil
Les espoirs réduits à néant

（廃線の　すりへった車輪の
地獄へと追いつめられた言葉
灰色の　どれもよく似たことがら
きりきりと風に舞う人びと

目にあざやかな筋肉　したたしい骨格
そして　感情のもや
柩のようにきっちり造られた　心臓
無に帰したさまざまの希望）

〈réduire à néant（無にする）〉という表現が、詩人の心情を要約している。暗い荒寥たる心象風景だ。ところが、右の第四連のあとに、エリュアールは《＊》（astérisque＝星印）を一つ打って、まったく新たな表現に移る。

Tu es venue l'après-midi crevait la terre
Et la terre et les hommes ont changé de sens
Et je me suis trouvé réglé comme un aimant
Réglé comme une vigne

A l'infini notre chemin le but des autres
Des abeilles volaient futures de leur miel
Et j'ai multiplié mes désirs de lumière
Pour en comprendre la raison

Tu es venue j'étais très triste j'ai dit oui
C'est à partir de toi que j'ai dit oui au monde
Petite fille je t'aimais comme un garçon
Ne peut aimer que son enfance

Avec la force d'un passé très loin très pur
Avec le feu d'une chanson sans fausse note
La pierre intacte et le courant furtif du sang
Dans la gorge et les lèvres

（きみはやって来た　その午後　大地は息もたえだえだった
そして　大地も人間もそれぞれの向きを変えた
磁石のように　葡萄の木のように　自分が
規正され　ととのえられたのが　ぼくには解ったしなく
ぼくらの道　他の人びとの目ざすところも　はて
蜜蜂たちは飛んでいた　かれらの蜜の未来そのものが——
ぼくは大きくふくらませた　光への欲望を
その理由を理解しようと

悲しみに沈んでいると　きみがやって来た　ぼく
　はウイと答えた
きみ以来だ　世界にウイと答えたのは
娘よ　少年期しか気に入らぬ少年のように
ぼくはきみを愛していた

とても遠い　とても純粋な過去を力に
調子のはずれない歌を火にして
乳房と唇のなかの
疵ひとつない宝石　ひめやかな血の流れ）

つづく三つの連で《Tu es venue》（きみはやって来た）はあと三回繰返される。あきらかにドミニクとの出会いのよろこびだ。「無に帰した」はずの希望は、よみがえる。

Tu es venue le vœu de vivre avait un corps
Il creusait la nuit lourde il caressait les ombres
Pour dissoudre leur boue et fondre leurs glaçons
Comme un œil qui voit clair

L'herbe fine figeait le vol des hirondelles
Et l'automne pesait dans le sac des ténèbres
Tu es venue les rives libéraient le fleuve
Pour le mener jusqu'à la mer

Tu es venue plus haute au fond de ma douleur
Que l'arbre séparé de la forêt sans air
Et le cri du chagrin du doute s'est brisé
Devant le jour de notre amour

Gloire l'ombre et la honte ont cédé au soleil
Le poids s'est allégé le fardeau s'est fait rire
Gloire le souterrain est devenu sommet
La misère s'est effacée

La place d'habitude où je m'abêtissais
Le couloir sans réveil l'impasse et la fatigue
Se sont mis à briller d'un feu battant des mains
L'éternité s'est dépliée

O toi mon agitée et ma calme pensée
Mon silence sonore et mon écho secret
Mon aveugle voyante et ma vue dépassée

Je n'ai plus eu que ta présence

Tu m'as couvert de ta confiance.

（きみはやって来た　生きる願いが肉体になり
重い夜をえぐり　闇を愛撫していた
こびりつく泥や氷を　溶かすため
視力のつよい目のように

やわらかい草が　飛んでいる燕を凍らせ
闇夜の袋を　秋が重たくしていたとき
きみはやって来た　川岸は川の流れを解放していた
海にまで行かせてやるために

きみはやって来た　ぼくの苦しみの底にまで
無風の森から切り離された木よりも気高く
悲嘆と疑惑の叫び声は消えた
ぼくらの愛の日をまえに

栄光よ　闇と恥辱は太陽に席をゆずり
重圧感はうすれ　重荷には笑いがおきた
栄光よ　地下道は山頂にひとしくなり
悲惨は失せた

習慣の場で　ぼくは馬鹿になりかけていた
目ざめのない廊下　行きどまり　疲労
それらが　手を打ち鳴らす炎にきらめきはじめ
永遠がおもむろに展かれた

おお　活潑に動きながらぼくの静かな想いとなる
　きみ
ぼくを高くひびかせる沈黙　ひそかなエコー
目の見える盲人　障害をこえた視線となる　きみ
ぼくにはもはや　きみの現存しかなかった

信頼できみはぼくをおおった。）

一九五〇年四月、「Europe」誌に発表されたこの詩のなかでも、「見ること、それは理解すること、行動すること」（Voir c'est comprendre c'est agir…〔『政治詩篇』「印刷工の同志たちに」〕）を信条としたエリュアール独特の《目》のはたらきが、とくに終わりの部分に鮮明である。悲痛な経験によってこころを盲にしていた詩

人は、〈aveugle voyante〉ドミニクの愛のおかげで彼自身 voyant（見える）状態をとりもどし、人生の困難をのりこえる（dépasser）視力・視線（vue）をふたたびわがものとする。《目》は、レイモン・ジャンが言うように、「エリュアールにとってつねに生の〈場〉として現われ、そこに世界が映し出されるだけでなく、世界はさらに発展し、豊かになり、真の色彩を見出す」（Raymond Jean, *Paul Eluard par lui-même*, Éditions du Seuil, 1968）――すなわち、詩人が愛をはぐくみ、創り、そのことで世界に対して oui と言う生の交換の場である。一九二五年生まれの批評家R・ジャンのもうひとつの文章を引けば、

「可視事実への再認識（感謝）だけが、愛であり得る。可視事実は、直接ものの形態を確定し、その形態を豊かにし、コミュニケーションを果たす何よりのものだから。だから、エリュアールにとって視線（regard）とは、とりわけ相手と結びつき愛する手段である。……見つめること（regarder）は、欲望の秩序に適い、また愛や友愛のそれにもかなうだろう」（R. Jean, *Lectures du désir*, Éditions du Seuil, 1977-p. 154）

というわけで、『豊かな目』の諸詩篇がニューシュとの愛を証したように、〈ドミニク詩篇〉は voyant 状態をうたうことで、第三の妻への愛の何よりの証となった。蛇足ながら、〈aveugle voyante〉の《aveugle》とは、愛の熱中状態（恋は盲目！）だが、《voyant(e)》は、その状態で初めて希望の世界、生きるよろこびが見えてくることの、暗喩的形容である。

二十一年ほど前、一九二九年十二月、「シュルレアリスム革命」第十二号誌上で、「すばらしい愛と、くたびれた人生と、いずれに軍配を挙げるか」とのアンケートに、エリュアールは、

「すばらしい愛は〔ひとを〕殺す（L'amour admirable tue）」と答えていた（動詞 tuer には、うんざりさせる、絶望させる、滅ぼす、などの意味もある）。この ironie を含むというより ironie そのものの回答は、詩人の真意にそって加筆すれば、「すばらしい愛もその対象の charnel（*le*）な現存を得なければ、ひとを絶望させ自殺させる」となるだろう。ニューシュの死後数カ月のエリュアールが、もう少しでそれを実証するところだった。いや、社会的行動の多忙さに追われている間にも、その危険はあったにちがいない。ドミニクの現存という可視事実が必要だった、――少なくとも詩人が理想とした（エリュアール流の弁証法によれば〈善の側〔au bien〕〉に立つ）愛の詩をうたうためには。

「愛とは、未完成の人間のこと」(L'amour c'est l'homme inachevé——*La Vie immédiate*, Poésie/Gallimard, p.24) とつねに意識しながら、「愛する、それは唯一の生きる理由」(Aimer, c'est l'unique raison de vivre——*Dit de la force de l'amour*, 1947=ラジオ放送の講演草稿) という結論にむかって生きた詩人にとって、しかし五十路なかば、多くの人生経験をへたいわば老熟期に——純粋に aveugle (盲目的なひと) になり得ないはずの年齢で——獲得した愛とは、どのようなものだったのか。

『不死鳥』のなかの「ぼくはきみを愛する」(Je t'aime) に、つぎの詩句がある。

Je t'aime pour toutes les femmes que je n'ai pas connues (ぼくはきみを愛する　知り合えなかったすべての女たちのため) ……

Je t'aime pour toutes les femmes que je n'aime pas (ぼくはきみを愛する　ぼくが愛していない女たちすべてのため) ……

右の表現中の前置詞 pour には、〈être puni *pour* un autre (他人に代わって罰をうける)〉の例のように、《代理》性をもたらす働きがある。従って「……のため」と訳した部分は、「……の代わりに」としても間違いではない。詩集成立の背景と、表現の対現実的必然性を考えて、「きみ」をドミニクとするなら、彼女は詩人の知らない (つまりじっさいに愛することのない) 女たちすべての《代理》として見られ、愛されていることになる。逆に言えば、ドミニクはかけがえのない唯一の女 (seule et unique femme) の性格を失い、生の〈場〉・生の交換の場である《目》にひとしく、詩人「ぼく」が他のさまざまの女とコミュニケーションをもつための、いわば開かれた官能の〈場〉と化していく。

もともと、人間の自由や快楽を抑圧し、既成のブルジョア的秩序やカビくさい個人主義的倫理に否を叫び、夢や狂気をとおして旧体制社会をつき崩す破壊的な美を表現してきたのが、シュルレアリスムであるとするなら、この芸術運動の中心にいたエリュアールが、一人の女を独占し、その自由を拘束するとともに愛を占有することに反対するのは、当然と言えた。むろん女の側から言えば、ただ一人の男に隷属するのでなく、ブルトン Breton の《ナジャ》*Nadja* のように、ついには錯乱にいたろうとも愛の全的自由を享受することが、当然のありかたと

なる。

一九三二年の『直接の生』(*La Vie immédiate*)のなかの一篇の題名は、「すべての女に代わる一人の女」(Une pour toutes)であり、すでにこの詩集にはニューシュが登場するけれど、エリュアールは彼女ただひとりに愛の歌を捧げるのでなく、「一人あるいは数人の……(Une ou plusieurs)」という複数的な対象を、ひとつの夢のなかに増殖させようとつとめていた。一九三八年の『自然な流れ』(*Cours naturel*)のなかにも、内容は異にしながらも全く同一題名の詩が収められ、また逆に、「一人の女に代わるすべての女」(Toutes pour une)と題する詩もあった。

言うもおろかなことだが、この愛は、あのドン・ファンの愛とは、全く異質なものである。また、現実生活では plusieurs の女どころか、ダリのもとへ妻ガラが去ったあとも、じつに長い年月、エリュアールはこの一人の女を執拗に慕いつづけていた(『ガラ宛書簡集』を見たまえ!)。しかし、彼の詩精神、彼の思想は、まちがいなく《une》を《toutes》へと開くものであった。

一九三六年の詩論「詩的明証」(L'évidence poétique)あたりから、ロートレアモンというよりデュカス(同一人物 Isidore-Lucien Ducasse)の精神を明確に継承した*エリュアールのなかに、《すべてのひと(tous)》という理念が根をふかくおろす。「詩は一人によるのでなく、万人(すべてのひと)によって作られねばならない」(La poésie doit être faite par *tous*. Non par *un*.)「詩人たちの良心は、万人のためにある」(Ils ont leur conscience pour eux〔*tous*〕)——この《tous》への志は、ブルトンと別れ、レジスタンスをきっかけに共産党に入党する時期(三八〜四二年)、いよいよ堅く固められていった。

* 「文芸研究」第四十四号の拙論を参照されたい。

一九四八年の『政治詩篇』、その冒頭の連作詩の総題は、「一人の人間の地平線から すべての人間の地平線へ」となっている。もはや《tous》への確かな歩みだけが、この詩人の存在理由だとさえ言えた。そして《tous》の理念は、言うまでもなく愛の対象を女に限るなら、そのまま女性形の《toutes》に変わる。「一人の人間の地平線から……(De l'horizon d'un homme…)」は、「一人の女の地平線から すべての女の地平線へ」(De l'horizon d'une femme à l'horizon de toutes)と書きかえて、少しも不自然ではないし何の無理もない。「未完成の人間」ではなく、知恵と経験をかさね深めてほとんど完成された(achevé)人間であるエリュアール

が描くその《地平線》に、肉の現存として偶然浮かび出たのが、ドミニクだった。

単純な「青春の幻想（イリュジオン）」ではない。彼女は当然最初から（詩人自身が意図すると否とにかかわらず）「視力のつよい目」のような思想的・社会的役割をになわされる。ある政治思想もしくはある政党にとって、詩人が persona grata（外交上の好ましい人物）として行動するとき、その伴侶もまた、単なる「一人の女」であることを止めねばならない。ドミニクとは、じつは便宜的な仮の名前にすぎない。

殁後三十年もたつと、第二次大戦後ほとんど国民的英雄のように讃えられた詩人にも、冷静な批判の刃があてられる。先にふれたリュック・ドコーヌの評伝のある部分が、そうだ。たとえば、一九四九年、エリュアールは、スターリンの七十歳の誕生日を祝う記録映画「われらの最も敬愛する人」に付ける詩を、頼まれて書いた。翌年、詩集『讃辞』(*Hommages*) の巻頭に収めた「Joseph Staline」がそれ。――反対派に対し苛酷な粛清をおこなったこの暴君を、詩人は当時まだ偉大で善良な人間と信じきっていた。しかしそれにしても、

「……ぼくらにとってスターリンは明日のために現存する／スターリンは今日　不幸せを追放する……（Et Staline pour nous est présent pour demain/Et Staline dissipe aujourd'hui le malheur…）」というような詩を書くくらいなら、ペンを折るべきではなかったか。詩人の廉恥心（un sentiment de pudeur）は、当然、このように「言葉をいやしめること」（dégrader sa parole）を拒んだはずではないか、と、ドコーヌは言う。

クロード・ロワあたりは、エリュアールの最良の詩の一つではないが、とてもいい詩だ、という微妙な言い方で、「Joseph Staline」を擁護している。詩人が「真実だと信じていること」(ce qu'il *croit* être la vérité) を、情熱と確信をもって書いているからだ、というのである(*Nous*-p. 526)。が、やはりこれは少々苦しい応援だ。

あるいはまた、ドコーヌは意地悪く、『ギリシア、わが理性の薔薇』(*Grèce ma rose de raison*, 1949) の一篇「老いたる青春」(Vieille Jeunesse) の一節、

A la fontaine il lui donna un baiser dans la bouche
Sous le ciel vide il lui donna ses dix doigts et ses yeux……

（泉で　彼は彼女の口に接吻した
からっぽの空の下で彼は彼女にもたらした　十本
の指と両の目を……）

をとらえ、接吻が一人の人間を殺すこともあるのを、詩人は知らなかったのか、と非難する。力づくで接吻されたと、ある娘が虚偽の申立てをし、スターリン傘下の民主的軍隊に属した法学士 Katsaros が、そのために軍法会議にかけられ、十年の懲役刑を課せられた……そういうことを、知らなかったのか、と。

さらに、一九五一年六月十三日付けのブルトンの公開書簡にドコーヌはふれる。――かつてともにチェコを訪れたおり歓迎してくれたジャーナリスト、Zavis Kalandra という人物、抵抗運動に加わり、ナチの強制収容所に入れられたこともあるこの人物が、人種差別にもとづく誤解のため、絞首刑の宣告をうけたが、何とかして救ってやれないものか、とブルトンは公開書簡でエリュアールの支援をもとめたのだ。これに対し、エリュアールは、六月十九日付けの「アクシオン」紙上に、そっけない返書を公表しただけであった。「罪状をはっきり認めている罪人たちと関わってはいられない。無実を叫ぶ無罪の人びとのために、なすべきことが、わたしにはあまりに多い」――と。Persona grata としての多忙を理由に、非人間的な一面をのぞかせたエリュアールは、非難されて当然であろう。

もっとも、ドコーヌは書いていないが、公開書簡の相手がブルトンだったのが、エリュアールの神経に触ったということは、充分あり得る。十三年前、エリュアールとブルトンは大激論のすえ、絶交した。メキシコで亡命中のトロツキー Leon Trotskii に会い、「独立革命芸術のために」と題する宣言文書を刊行したブルトンは、帰国後、スターリン派の「コミューヌ」誌に寄稿した、という理由だけでエリュアールを容赦なく叩いた。もう三、四年前から、二人の間にみぞは深まっていて、「芸術は、祖国とか国家主義とかと無関係なものだ」と考えるブルトンと、「詩は万人のために書かれるべきだ。苦しむ民衆やしいたげられる祖国と無関係ではあり得ない」と主張するエリュアールが訣別するのは、時間の問題となっていた。エリュアールたちが独軍に占領されたパリで、危険をおかして抵抗運動をしているとき、ブルトンはアメリカに逃れ、のんびり《魔法》めいた言葉の遊びをやっていた。今ごろ、のこのこ出てきて何を言うか、という反撥がエリュアールに強くあっただろう、とわたしは想像する。詩人も人間であるからには、一から

十まで正義にのっとって行動するとは限らない。

だがそれよりも、コミュニストになってからのエリュアールの詩が、さきの「スターリン」の詩についてのドコーヌの評言のように、「言葉(詩人本来の)を dégrader する」方向にのみはたして傾いていったのか、どうか——そのことがもっと気になる。

ブルトンの影響下に成長、シュルレアリスムの正統的遺産の継承者と自負する詩人、『アルゴールの城館にて』の小説家でもあるジュリアン・グラック Julien Gracq は、エリュアールの死の翌日、「エリュアール作品の到達点は、コミュニスムだったとお考えになりますか」とのジャーナリストの質問に、こう答えた。「そうは思えませんな。もっとも重要な、さらに言えば、わたしにとって(他の多くの人たちにとっても)もっともすぐれたエリュアール作品の大部分は、戦前に書かれています。一人の詩人に対して、共産党への入党は、拘束的効果しかもたらしはしないと思いますよ。一九四〇年以後のいくつかのいい詩ってのは、レジスタンスの思い出につながって残るんですねえ。白状しますが、何回か努力はしましたが、以後のは読むのを止しました」

一九五二年十一月の週刊誌「Arts」に発表されたこのインタビュー記事を、自分の書いた評伝に引用することで、ドコーヌは、コミュニスト・エリュアールの作品を低く評価する側についた。

ドミニクへの愛が中心になった『不死鳥(フェニックス)』への評価も、かなり否定的だ。たとえば、前にちょっと触れた「ぼくはきみを愛する」——

Je t'aime pour toutes les femmes que je n'ai pas connues
Je t'aime pour tous les temps où je n'ai pas vécu
Pour l'odeur du grand large et l'odeur du pain chaud
Pour la neige qui fond pour les premières fleurs
Pour les animaux purs que l'homme n'effraie pas
Je t'aime pour aimer
Je t'aime pour toutes les femmes que je n'aime pas
……

(ぼくはきみを愛する　知り合えなかった女たちすべてのため
ぼくはきみを愛する　生きられなかったすべての時代のため

海原のかなたの匂いと　あたたかいパンの匂いの
　ため
最初の花花のため　溶ける雪のため
人間がおびやかさない無垢の動物たちのため
愛するため　ぼくはきみを愛する
ぼくはきみを愛する　ぼくが愛していない女たち
　すべてのため……)

これについて――霊感はかなり月並みだし、表現もかなり力に欠ける。かつて詩「自由」について、バンジャマン・ペレ B. Péret が指摘したことだが、こうした連禱風の表現は、残念ながら詩のことばを貧困化させ、ほとんど技巧しか印象づけない――というふうに、ドコーヌは手きびしい批判を加えている。さらには、「春(Printemps)」を槍玉にあげ、ふしぎに不安定で漠とした不快な感情を読者がおぼえるのは、詩人が自分の力量をいぶかりながらも、過剰な意志表明によって「愛の模範的な像(la statue exemplaire de l'amour)」を創ろうとムリしているからではないか、という(*P. Eluard*-p. 248)。

〈Un très regrettable appauvrissement(たいへん惜しまれる貧困化)〉を詩にもたらす〈le recours à la litanie(連禱風のうったえ方)〉とペレやドコーヌに解された表現は、しかし、《すべての人間の地平線(l'horizon de tous)》をめざす詩人にとって避けられないものではなかったか。芸術主義的観点からすれば〈貧困化〉とされる表現も、より大きな人間的視野にとらえなおすなら、生命の《自然な流れ》にのっとった歌のよみがえりであり、万人のたましいに直通する明快で軽妙なことばの回復にほかならない。中心にあるのは、たとえばブルトンの《狂気の愛(amour fou)》の錯乱とは正反対の、《理性(raison)》を核として秩序をもとめる愛のはたらきなのだ。《貧困化》ではなくて、複雑な時代にはいっそう困難な《単純化(simplification)》だと、わたしは思う。

『跡絶えざるポエジー』(*Poésie ininterrompue*, 1946, 1953)をめぐるR・ヴェルニエの評論の一ページに記されたつぎのことばを否定する者は、いないだろう。

「エリュアール作品において、ひさしく、愛は、混沌たる一宇宙を照らし出すと同時に、その宇宙に秩序をもたらし、その秩序の目的そのものを示すものであった」(Richard Vernier, *Poésie ininterrompue et la poétique de Paul Éluard*, Mouton, 1971-p. 169)

愛は、ヴェルニエの造語によれば、そのまま人びとが

頼みとし、保護をねがうもの、

〈l'amour-refuge〉

そう記すほかない一宇宙なのだ。ランボー Rimbaud からブルトンへとひき継がれた、芸術主義的観点からのみ見れば豊饒とされるであろう錯乱・無秩序を、エリュアールは（シュルレアリスムをくぐった後に）拒んだ。そのことを忘れてはいけない。

ドコーヌが〈un étrange sentiment d'incertitude, de malaise（ふしぎに不安定で漠とした不快な感情）〉と覚えたものも、じつはエリュアールの愛の宇宙的なひろがり、一人の愛（あるいは couple（カップル）のエゴイズムによる愛）から万人の愛へと拡げられ、また、一人の女がすべての女へと限りなく増殖して、ついに〈quasi-anonymat（ほとんど匿名）〉の状態になっていく、そういういわば詩人の倫理的美学（ESTHETIQUE ETHIQUE）から生じたものだろう。

Couple のエゴイズムが抱える秩序、その小さな愛の宇宙を脱け出せない人びとに、《すべての人間の地平線》をめざす愛、その表現をめざすエリュアールの技法は、単純すぎて貧しく、明快すぎてかえって不安定に思えるのだろう。

ともあれ、ドミニクは、ヴェルニエの言う万人のための〈l'amour-refuge〉の地平線に現存しなければならない。でなければ、ニューシュの死に打ちのめされた詩人の内なる《mal（悪）》を《bien（善）》へと換（か）え、そのいわば公正証明を介して、万人の悪を万人の善へと換える《倫理のレッスン》（一九五〇年刊の詩集題名＝*Une leçon de morale*）は実行できない。それがエリュアール流の《悪魔祓い（exorcisme）》なのだ。

たとえ五十路なかばの詩人に「新しい青春」などありえず、ドミニクが彼のイリュジオンの犠牲だったとしても、ドブルイユ Jean-Yves Debreuille が「ぼくはきみを愛する」に触れて記したように、「全体的な幸福への意志（volonté de bonheur universel）」「その幸福を獲得するための戦いへの意志（volonté de lutte pour l'obtenir）」――集団的な意志が、かれら二人の愛をとおして詩的に永久的に存在させられたことは、まぎれもない。（cf.-Éluard ou Le pouvoir du mot, A. G. Nizet, 1977-p. 168）コミュニスムが詩人の到達点だったというより、わたしなどにはすぐ宮沢賢治の有名なことばが思い出されるけれど、世界全体の「universel な幸福」への思いに燃える愛こそが、到達点だったのである。

エリュアールが死んだ夜、涙も涸れたように台所にぼ

んやり立っていたドミニクは、そっけない声で、
「《有利な結婚相手》じゃなかったわね」
と、居合わせたクロード・ロワに告げた(*Nous*-p. 529)。しかし、エリュアールとともにすべての読者が到達する愛、増殖する集団的な愛にとって、ドミニクは《有利な結婚相手》だった。レジスタンス時代の代表作「自由」をエリュアールに生ませたニューシュとの愛はさておき(この詩の最後の「自由よ」という呼びかけは、未定稿の段階では「ニューシュよ」となっていた。そこにも、personnel な愛を消し、それを万人の希望へと転じる思想が、読みとれる)、《苦悩の首都》(二六年刊詩集の題名=*Capitale de la douleur*)の女あるじ、世界の不幸の上に裸で寝そべる獣のような愛(詩篇〈Sans rancune〉のなかの表現)を詩人に強いた第一の妻ガラとの、エゴイスティクな愛とつき比べると、ドミニクとの愛の内質はいっそう鮮明になるはずである。

終わりに、また愚かしい蛇足をひとつ。

《L'horizon de tous》をめざして、愛のいわば宇宙的な増殖(multiplication, se multiplier)を詩にうたい上げたエリュアールを想ういっぽうで、わたしの頭にはべつの増殖が浮かぶ。アンチ・テアトルの代表的人物、『犀』(Rhinocéros, 1959)の作者イョネスコ Eugène Ionesco が、舞台の上にというより観客の脳のなかに増殖させる、あのいまわしい獣たち……。ファシズム、集団的ヒステリー症状をめざす恐るべき観念の増殖。《増殖》には、一歩まちがえば全く別の世界、自由もなければ愛もない闇夜へと、世界を転じさせる危険がつきまとう。エリュアールの愛もまた、きわどいところを辿っていたのではないか、とりわけ詩人の晩年において。〈スターリン詩篇〉を槍玉に挙げたドコーヌの危惧は、その意味でうべなえよう。《一人》を《万人》へつなぐ道には、そういう厄介な問題が横たわっている。

唐突だが、智恵子歿後、急速にいわゆる〈戦争協力詩〉の代表的なうたい手に変貌していった高村光太郎をも、いまわたしは思い出している。まれな愛の詩集『智恵子抄』の詩人は、ちょうどニューシュ歿後のエリュアールに似てふかい悲痛の情と絶望感にとらわれていた。その暗い胸の空虚を埋めるように、この骨太いヒューマニストは自分自身を裏切り、軍国主義思想を詩作品のなかに増殖させ、感じやすい若者たちを死へかりたてたのだった。亡き妻をしのぶ「荒涼たる帰宅」から戦争讃美の「彼等を撃つ」までは、わずか一歩の歩幅である。不快な足音とともに醜い犀どもが駆けずりまわる時代には、その〈一歩〉を拒否し、《tous (toutes)》に背を向ける

ことこそ重要な詩人の使命であり、morale であったはずだ。現実にそれが容易でないことを、あれほどの意志のひと光太郎は証明した。

エリュアールの最後の愛は、そのような厄介な問題をかかえこんでいる。

（昭61・8・6）